

怡土城出土の瓦塼類に関する一考察

—金龍寺所蔵資料の紹介をかねて—

江崎 靖隆（伊都国歴史博物館）

1. はじめに

怡土城は糸島市と福岡市とが境を接する高祖山（標高 416 m）の西斜面一帯に城域をもつ古代山城である（第 1 図）。『続日本紀』によると、天平勝宝 8 年（756）年 6 月から神護景雲 2（768）年 2 月の約 12 年の歳月を要して完成し、築城の担当は、当初は吉備真備、途中から佐伯今毛人に交代をしたが、大宰府の反対を押し切って防人までも動員し、築城を急がせて完成させている。

現在、確認されている主要遺構は、高祖山西側低地を巡る土塁及び 5 か所の城門、北側の尾根沿いに第 1～5 号望楼跡、あと、怡土城郭内に、縣庄礎石群、社辺礎石群、一丁目見礎石群、一ノ坂礎石群が確認されている（第 2 図）。

伊都国歴史博物館では、築城 1250 周年、国指定 80 周年を記念して、平成 30 年度冬季企画展は「怡土城」を題材とした企画展示を開催し、その過程の中で、怡土城出土瓦塼類の再整理を行った。

また、平成 29 年度には、鏡山猛氏が昭和 11（1936）年に調査を行った金龍寺所蔵資料が同寺で発見された。これらの資料は、全て未図化であったため、怡土城関係瓦塼類を対象に、写真撮影を行い図化することに務めた。

本稿は金龍寺所蔵資料の紹介とともに、一連の怡土城出土瓦塼類の再検討を通じて得られた新知見を報告するものである。

なお、既に報告されている資料については、詳細は省略することとし、瓦塼類の分類については『大宰府政庁跡』、235 型式の範傷の進行状況については、中村和博氏により、I～X 期に細分されており、これに準拠することとする（九州歴史資料館 2002、瓜生 2006、中村 2008）。

2. 金龍寺所蔵資料について

昭和 11（1936）年に行われた鏡山猛氏による怡土城の調査は、文献から表採資料の調査、各礎石群、城門、土塁の調査など多岐にわたる（鏡山

1937）。怡土城関係遺物の調査は、怡土小学校所蔵資料、金龍寺所蔵資料、奈良崎要氏所蔵資料、笠敬氏所蔵資料を対象に行われた。このうち、平成 29 年度に金龍寺所蔵資料が、同寺の倉庫から発見され、伊都国歴史博物館へ寄贈を受けたことにともない、資料の整理、調査を行ったので、ここで報告したい（第 3～5 図）。

1 は丸瓦部分を欠損している軒丸瓦で、鏡山報告の図版 3－2（左）である。瓦当との接合は、半月形の丸瓦を瓦当の周縁まで入れている。復元直径 17.4cm、蓮子数は 1＋8、弁数は F8T1、口縁文様は S24 で、弁区径が 11.4cm であることから 235 型式である。範傷は瓦当部分が欠損しているが、1, 2 の範傷痕跡を確認できる。

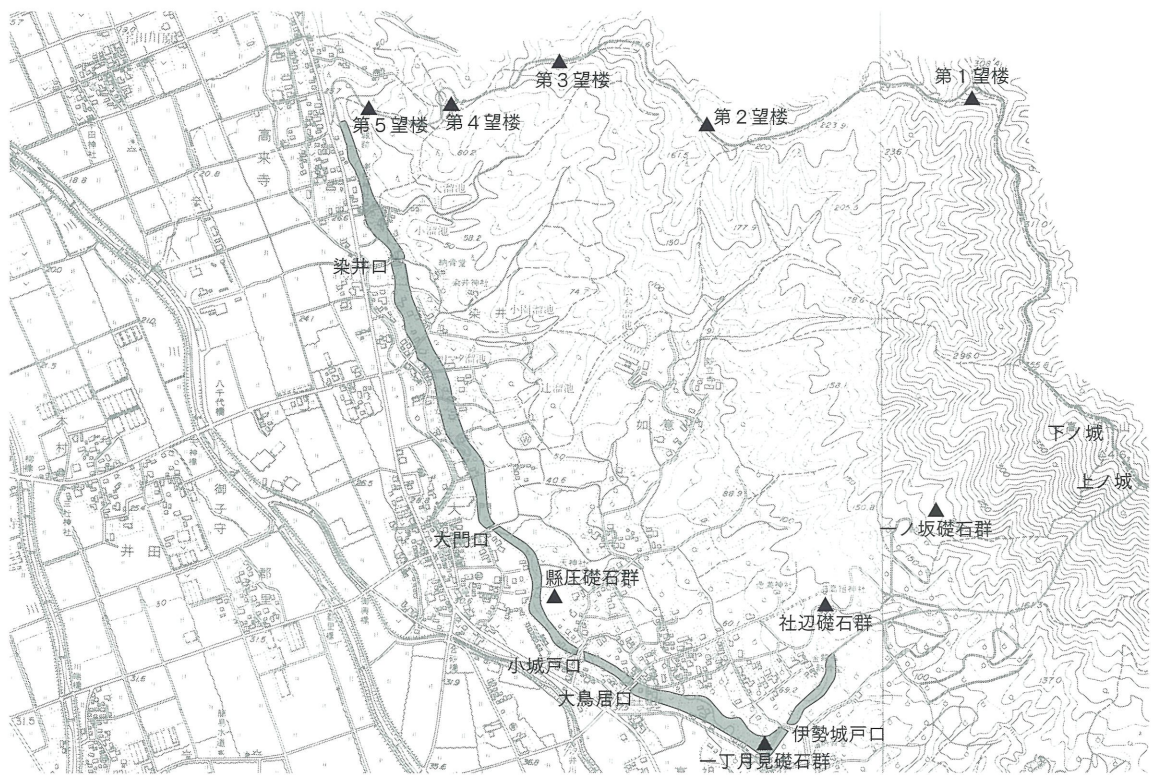
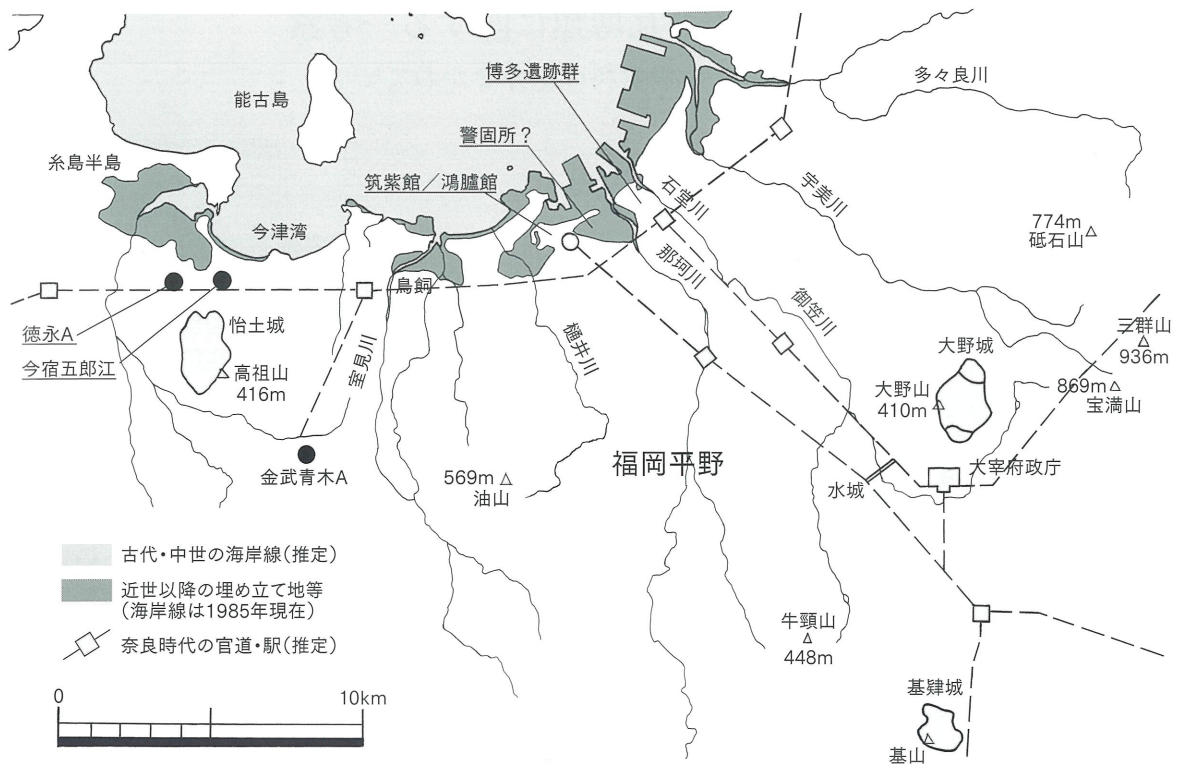
2 は斜格子文丸瓦で、胴部と玉縁の一部のみの残存である。鏡山報告の図版 3－2（右）に該当する。外面は長手叩打具による斜格子打捺痕、内面は布目痕である。残存長 9.6cm、残存幅 10.6cm、厚さ 2.4cm を測り、両面共に明灰色である。

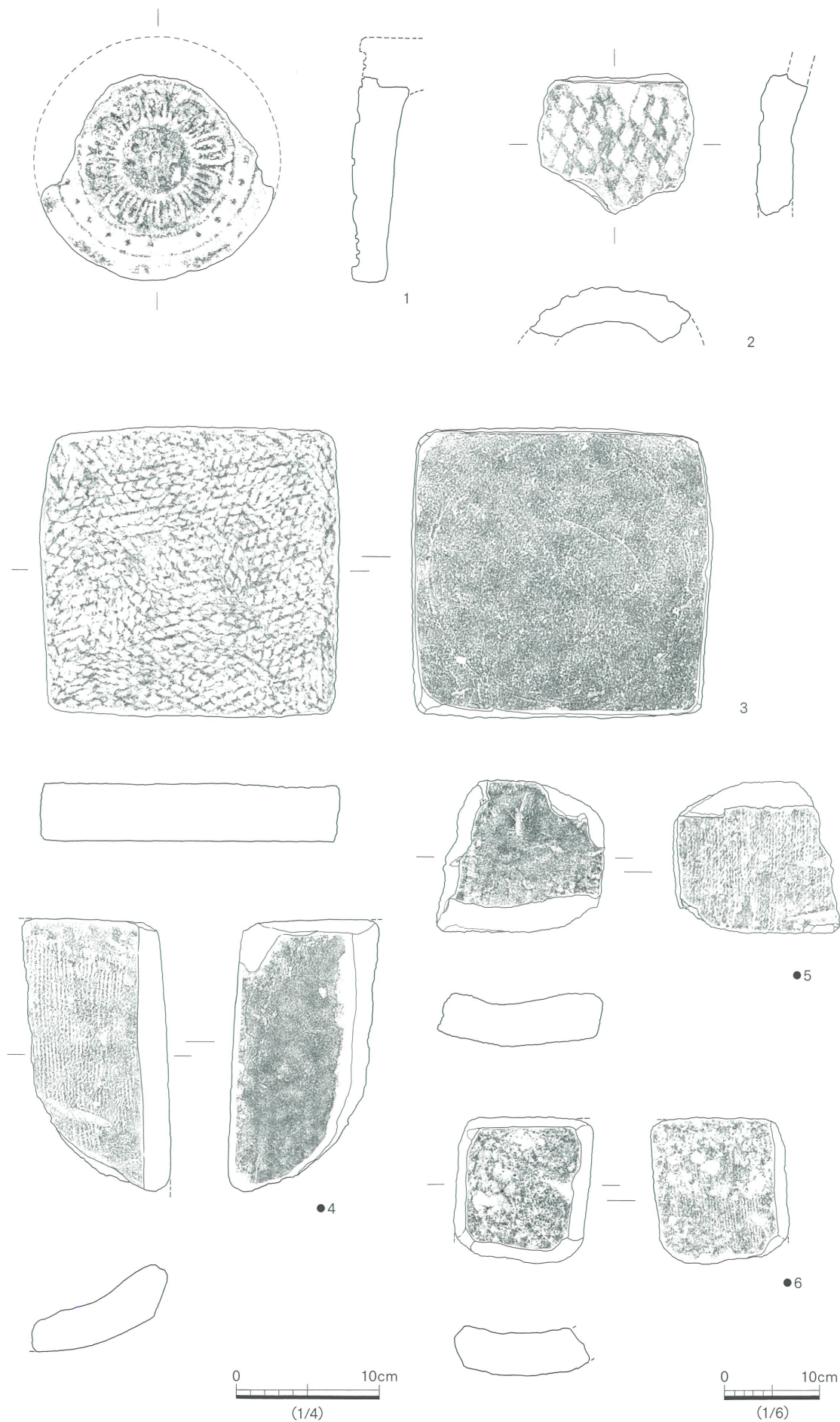
3 は方形塼で、完形であるが、無文で装飾文様が無い。1 枚造りであり、4 つの角には、粘土板を 2 枚接合した跡が確認でき、上面、側面は斜格子状にタタキ調整、下面はナデ調整で仕上げており、タタキをナデ消していない。長さ 20.2cm、幅 21.0cm、厚さ 4.1cm を測る。

4～20 は平瓦で、いずれも 1 枚造りである。凸面は縄目タタキ、凹面は布目痕を残し、側面はへう削りで面取りされる。焼成は還元焼成が甘いのが多く、明褐色を呈するものが多い。塼と同じく瓦範に粘土板を 2 枚重ねて製作するものが主流を占めるが、11 のように、厚さ 2.3cm の粘土板と厚さ 2.7cm の粘土板を組み合わせるなど厚さの異なる粘土板を組み合わせている。また、14、16～20 のように粘土板を 1 枚だけで成形した厚さ 1.7～2.3cm 程度の薄いものも存在する。

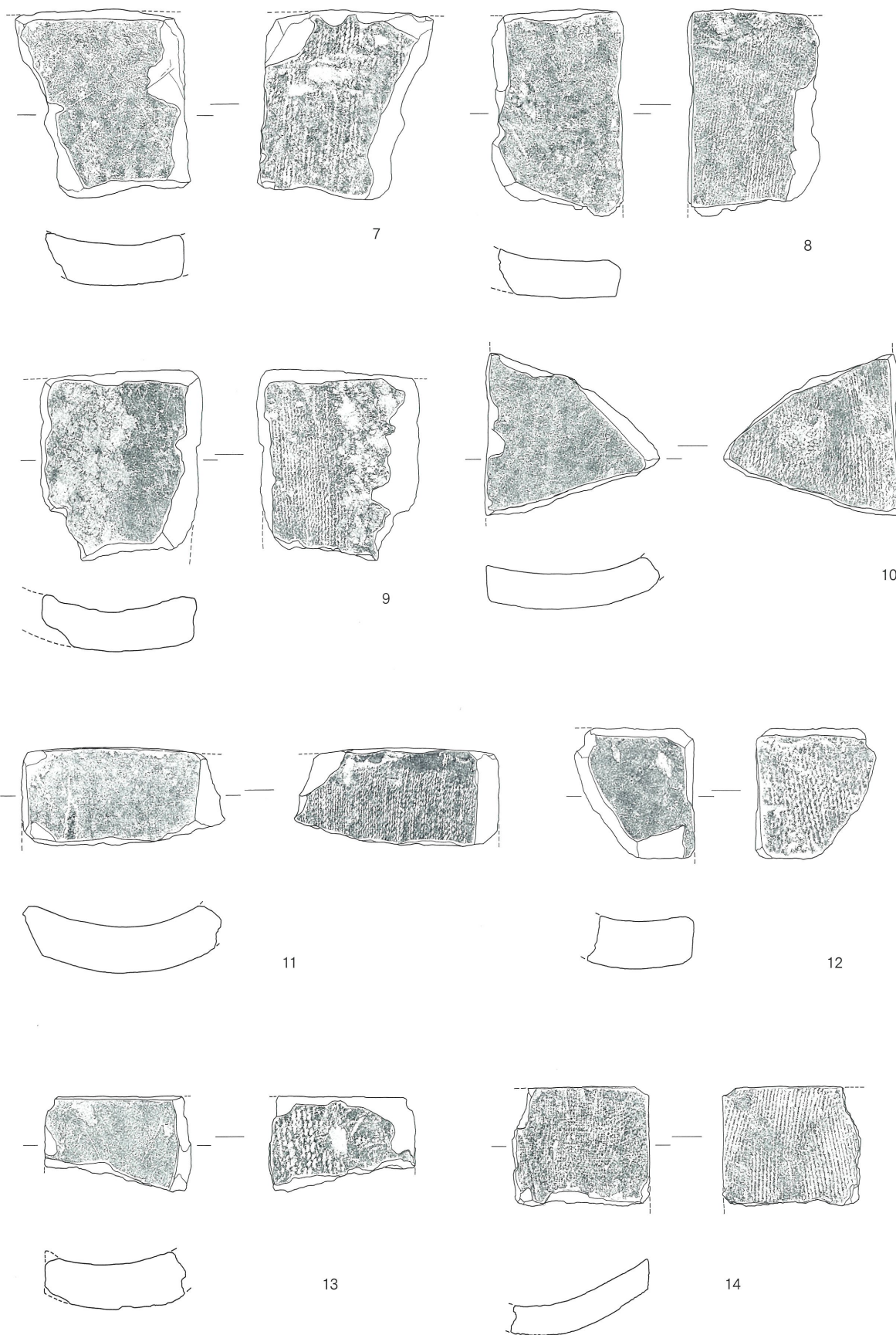
3. 怡土城出土瓦塼類について

ここでは、怡土城出土の瓦塼類について、その





第3図 金龍寺所蔵資料実測図① (1/4、●は1/6)



0 10cm

第4図 金龍寺所蔵資料実測図② (1/6)



第5図 金龍寺所蔵資料実測図③ (1/6)

代表的な遺物を取り上げ、説明していきたい（第6図、写真1、2）。

(1) 塼

怡土城出土の塼は、第5望楼から出土した直方体塼（2、3）と鏡山報告の正方形塼（1）がある。直方体塼は、長さ32～33cm、幅19～20cm、厚さ8～9cmとほぼ同大で、箱状の瓦範で、粘土板2枚を使用し、成形している。一方、正方形塼は1点しか出土してなく、長さ20.2cm、幅21.0cm、厚さ4.1cmを測る。調整はタタキのままナデ消すことをしていない。

怡土城出土の塼は、いずれも無文で、蓮華文な

どの装飾文様がない。大宰府政庁における使用例から、基壇の化粧として使われたと考えられるが、怡土城のような防衛施設には、装飾塼のような華美な塼は求められなかった可能性がある。

(2) 鬼瓦

怡土城からは、大宰府式鬼瓦が4点出土しており、型式はⅠ式A、Ⅱ式、Ⅲ式Bである。このほかに、大圓寺所蔵の大宰府式系鬼瓦がある。

Ⅰ式A（4）は、1点のみの出土である。糸島市末永字松ヶ浦の立花久松氏の自宅裏手にある畑より採取されたもので、鏡山報告の図版3-1（中央）に該当する。

資料は2つの破片からなるが、全体的に磨滅が著しく、2片の摩耗具合も同じであることから、本来は同一の個体と考えられる。詳細に見ていくと、左上部の眉間から眉、珠文にかけて摩耗が右半分よりも若干進んでいない。また、もう一つの破片も左下の犬歯から珠文にかけて同様の傾向を示している。このように、左右の摩耗具合がわずかに異なるが、自然磨耗によるものであろう。

I式Aは、大宰府政庁跡を中心に水城正門付近、水城跡御笠川右岸付近、大野城太宰府口城門跡で出土し、大宰府政庁Ⅱ期の創建期に造られた鬼瓦として認識されている。怡土城出土例から7世紀後半～8世紀中頃と比較的長い瓦範の使用が見積もられている（毛利1980、栗原1995）。近年の研究においては、井形進氏が当鬼瓦の摩耗が著しいのは自然的なものだけではなく、範そのものの劣化によるものであるとし、I式Aは、8世紀第1四半期までの製作で、怡土城築城の頃には製作されなかった可能性が指摘されている（井形2018）。しかし、前述したように、当鬼瓦を実見する限りでは、範傷が無く、全体的な摩耗が範の劣化を示しているのかどうかを証明するのは難しいのが現状であろう。

Ⅱ式（写真1）は、先述したI式A鬼瓦と同地点から採集された1点で、表面の一部が剥落し、自然的な摩耗が著しい。空豆形の怒り目と上顎には現状では犬歯を含めて5本が確認できる。また眉間には釘穴が穿たれている。Ⅱ式は大宰府政庁跡、観世音寺、三宅廃寺、杉塚廃寺、弥勒寺跡、肥前国分寺跡など筑前を中心に豊前、肥前と広範囲に分布が認められる。I式とⅡ式はほぼ同時期に存在していると考えられており、表採資料であるが、I式とⅡ式が同地点で採集されていることは興味を引く所である。

Ⅲ式B（5）は、第4望楼から出土した鬼瓦片1点で、外縁の珠文が小さく、間隔が密で口端の卷髭表現が無い。Ⅲ式Bは大宰府政庁第15次調査や鴻臚館で出土しており、政庁第Ⅲ期再建期に当てる説と奈良時代の範囲で考える説に分かれている。いずれにしてもI式A、Ⅱ式よりも型式的に後出するものと考えられている。

6は大圓寺所蔵の鬼瓦で、詳細は既に報告されているので、ここでは省略するが、北浦廃寺出土鬼瓦との類似が指摘されている資料である。粘土

板に顔の各部位を貼り付ける平面的な仕上がりとなる手作りの鬼瓦で、太宰府式系鬼瓦である。小田富士雄氏は太宰府系の憤怒相の脱化形式と考えて、9世紀代に比定している（小田1981）。

このように、怡土城は、大宰府式鬼瓦がI式、Ⅱ式、Ⅲ式と継続する形で確認でき、その後も大宰府式系鬼瓦が供給されるなど、大宰府政庁の鬼瓦変遷と基調を同じくしている点は重要である。特にI式Aは大宰府政庁や大野城、水城など重要施設からしか出土しないことから、怡土城は大宰府指揮下のもとに築城された重要防衛施設と考えられる。

（3）軒丸瓦

怡土城出土の軒丸瓦は、中山平次郎氏が考古学雑誌で報告した資料と鏡山報告資料、大圓寺所蔵資料、高祖榎町遺跡出土例の計5点が存在する。

7は糸島市高祖に在住する上原氏が高祖山で採集したもので、中山平次郎氏が『考古学雑誌』に報告した軒丸瓦である（中山1916）。瓦当文様の拓本図を見ると、直径約17.2cm、蓮子数は不明、弁数はF8T1、口縁文様はS24であることから、235型式と考えられる。8は鏡山猛氏が怡土城関係資料を調査した際の軒丸瓦で、『怡土城址の調査』で報告されている（鏡山1937）。復元直径17.4cm、蓮子数は1+8、弁数はF8T1、口縁文様はS24で、弁区径が11.4cmであることからこれも235型式である。9は高祖榎町遺跡の6号甕棺内埋土から出土した軒丸瓦1点と須恵器の高台付杯3点である（角1995）。軒丸瓦は復元直径17.6cm、蓮子数は1+8、弁数はF8T1、口縁文様はS24で235型式である。共伴した須恵器の高台付杯は、8世紀中頃～後半に比定でき、235型式が8世紀中頃に使用されたと考えられていることと矛盾しない。写真2の左右の軒丸瓦は、大正時代に、糸島史談会会長であった木下讃太郎氏によって採集された軒丸瓦で、大圓寺（福岡市中央区唐人町）が所蔵していたが、盗難に遭い現在では写真しか残っていないのが残念である。写真2の右の軒丸瓦で、瓦当部分を見ると、弁数F8T1、口縁文様はS24、中房の蓮子数は不明であるが、235型式の可能性が高い。写真2の左の軒丸瓦は、破片資料であるが、複弁であることと中房の蓮子数が1+8であることから、これも235型式であろう。

このように、怡土城から出土する軒丸瓦を概観したが、その特徴としては、235 型式に限られ、他の型式を含まないこと、235 型式とセットとなる 637a 型式の軒平瓦が全く出土しないことである。

235 型式は、鴻臚館Ⅱ式とも呼ばれ、瓦当の特徴は、中房が 223 型式と比較して 1 + 8 になり、蓮弁が複弁 7 弁 + 単弁 1 弁という変則的な文様を呈することである。出土例をあたってみると、太宰府政庁跡からの出土はなく、観世音寺、筑前国分寺、筑前国分尼寺、水城に見られ、限られた施設で出土するという特徴が見られる。

この軒丸瓦は、筑前国分寺の調査では 104 点以上が出土し、出土率の 36% を占めており、極めて出土率が高かったことから、筑前国分寺創建期専用の瓦として誕生し、軒平瓦 637a 型式とセットになることが明らかとなっている（石松 1993）。

小田富士雄氏によると、筑前国分寺は天平十八（746）年～天平勝宝 8（756）年までに創建された（小田 1970）。その造瓦集団は、太宰府系工人が中心であり、235 型式は観世音寺や国分尼寺にも供給され、746 年の観世音寺創建以降は、観世音寺系工人が中心になるとされ、造瓦集団が変わった可能性が指摘されている（中村 2008）。また、746 年の観世音寺創建以降は、瓦の流通のあり方も変わり、軒丸瓦は軒丸瓦だけ、軒平瓦は軒平瓦だけの流通が始まり、軒丸瓦と軒平瓦のセット関係が崩れることが指摘されている（主税 2019）。

このことから、怡土城の築城は、筑前国分寺の創建後すぐに始まっていることから、この観世音寺系工人が主に生産する 235 型式が、そのまま供給されたものと考えられ、軒平瓦 637a の供給はなかったものと考えたい。したがって、怡土城の築城にあたっては、急を要したこともあって、新たな軒丸瓦の創出や他型式の軒丸瓦の供給は行われなかったと推測される。

（４）丸瓦

丸瓦（10）の出土は 1 点のみで、鏡山報告資料として報告書に写真が掲載されている（鏡山 1937）。斜格子文の丸瓦であり、詳細は前述したので、ここでは省略するが、出土点数の少なさから、瓦葺建物の主体として使用されたとは考えに

くく、後述するように、平瓦が主体の瓦葺建物を想定する。

（５）平瓦・熨斗瓦

怡土城の採集資料及び発掘調査資料の中で、最も出土点数が多く、瓦葺建物の主体をなす瓦で、平瓦と熨斗瓦がある（11、12）。

平瓦は長さ 39 ～ 43cm、下端幅 27 ～ 28cm、厚さ 4 ～ 6cm と分厚いもので、怡土城専用の瓦として生産されている。摸骨桶造りのものと 1 枚造りのものがあり、前者の出土量は少なく、後者が圧倒的に多い。摸骨桶技法から 1 枚造りへと変化したのであろう。平瓦の 1 枚造りは、厚さの異なる粘土板を 2 枚使用して製作するものが主流で、中には粘土板 1 枚だけの薄いものも存在する。この厚手のものと薄手のものがどのように使い分けされていたか現在のところ不明である。

熨斗瓦は、粘土板を瓦範に押し付けて製作した焼成前平瓦を半裁することで作られている。薄手の熨斗瓦は確認できないことから、厚手の熨斗瓦が瓦葺きとしては用いられている。

怡土城では、この厚手の平瓦と熨斗瓦が、大量に出土するため、これら瓦を主体とする瓦葺建物が想定されるが、その生産は怡土城付近で行われたと推測できる。平瓦は瓦葺礎石建物を建てる際に大量に必要とされるため、これを満足させるには、造瓦技術の改良と造瓦工人の確保が必要である。摸骨桶技法から 1 枚造りへの変化は、瓦の量産と省略化の結果と考えられる。

また、怡土城出土の平瓦・熨斗瓦は、怡土城築城に際して独自に創出された瓦であるが、還元焼成が不完全なものが多く、その生産において太宰府系工人が直接的に関与したとは考えにくい。怡土城築城にあたって集められた在地系工人による生産と想定される。

４．怡土城の終焉

怡土城の終焉については、これまでの発掘調査の成果から、最も新しい土器が 9 世紀初頭であり、これに近い時期が想定されている（瓜生 2006）。参考に怡土城周辺遺跡を見ると、金武青木 A 遺跡（福岡市早良区）では、「怡土城擬大領」「専当其事」「別六」と書かれた木簡が出土しており、怡土城の人的・物的供給基地の役割を担うと考えられているが、7 世紀後半から利用され、8 世紀後半に

ピークを迎え、9世紀前半に廃絶される（加藤2012）。したがって、怡土城の廃城もその頃と理解できる。

この他、怡土城周辺では、怡土城系平瓦の出土が認められる。例えば、徳永A遺跡（福岡市西区）では、9～10世紀前半の掘立柱建物や鍛冶炉が見つかっており、中国系陶磁器（越州窯、邢州窯、長沙窯）が多く出土したことから、「主船司」と目されたが、現在では否定されている（森本2016）。この遺跡では、怡土城系平瓦が多く出土しており、9～10世紀前半と考えられている。また、潤地頭給遺跡や前原西町遺跡2次調査では、怡土城系平瓦を礎石に利用する掘立柱建物が確認されている。両遺跡とも時期は不明であるが、怡土城系平瓦の2次利用が想定できる。

このことから、9世紀初頭から前半に、怡土城が廃城した後に、怡土城系平瓦が建築部材として再流通・再利用していることが分かる。

5. おわりに

これまで、怡土城出土の瓦塼類について概観したが、大宰府指揮のもとに怡土城の築城が開始され、それに必要な瓦は、太宰府系瓦範を用いた鬼瓦、軒丸瓦、塼と怡土城独自に創出された平瓦、熨斗瓦に分かれる。特に、平瓦は必要枚数が多く、その生産は怡土城付近で行われたとみるのが合理的であろう。

近年、怡土城周辺の発掘調査が進んでいる。元岡・桑原遺跡（福岡市西区）では、8世紀中頃～後半の製鉄炉が50基近く検出され、時期的にも怡土城への武器供給を行っていた施設と考えられる（菅波2005、2007）。また、金武青木A遺跡では、鍛冶炉や焼塩土器が大量に出土し、先の木簡などから、怡土城を巡る人的・物的供給施設と考えられている（加藤2012）。さらに、中原遺跡（唐津市）では、防人に関する重要な木簡（8号木簡）や相模型摸倣坏が出土している。8号木簡の1次文書には「甲斐国□戌□」、2次文書には「□暦8年」と書かれており、延暦8（789）年に肥前国に甲斐国や相模国などの東国の防人が配置されていたことを示している（美浦2009）。

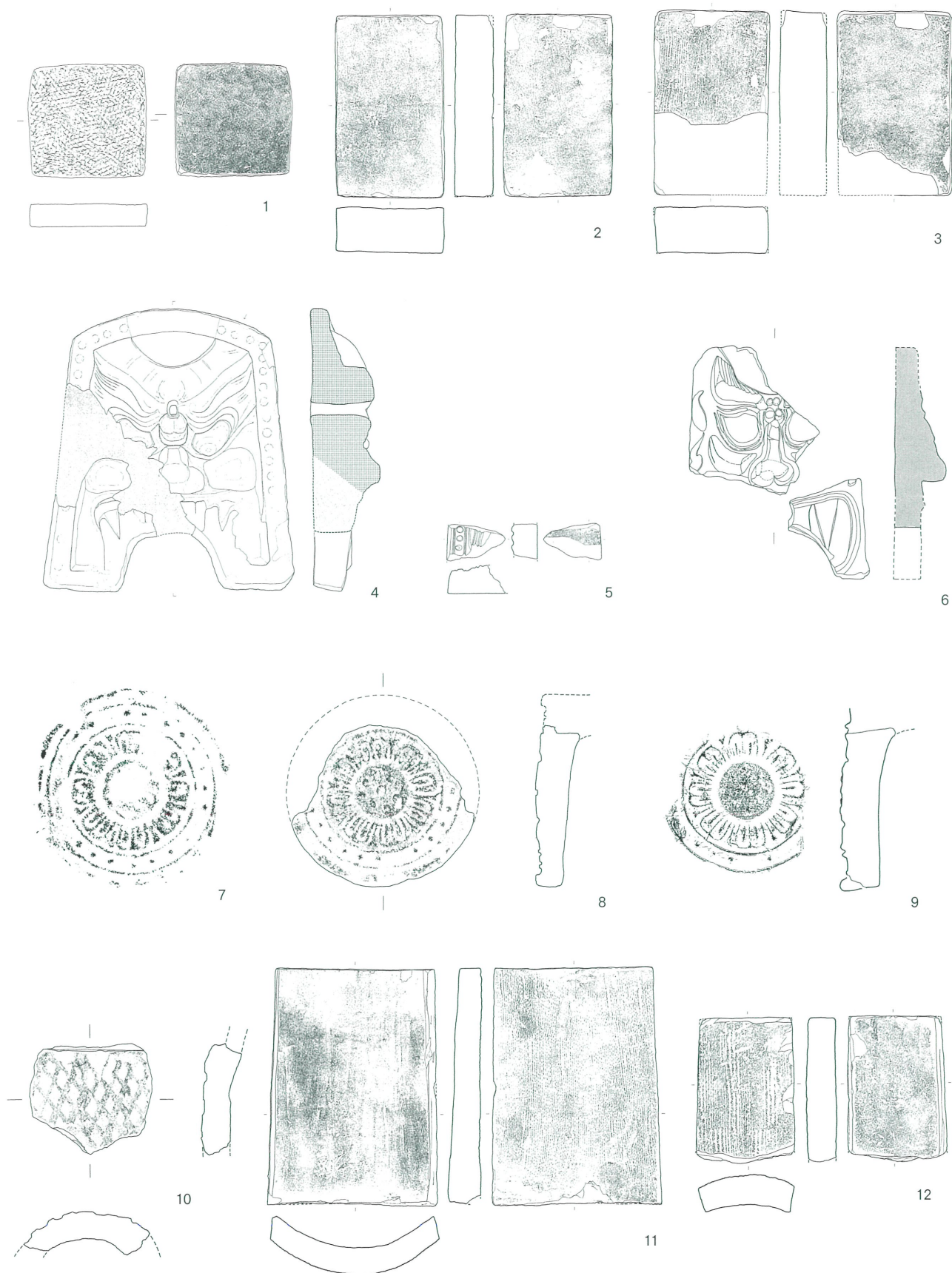
このように、大宰府指揮のもとに怡土城を巡る人的な配置や物的な供給体制が構築され、それらの施設が有機的に結びついていることが明らかに

なっている。

今後、怡土城出土瓦の生産や供給のあり方、怡土城の内部構造の解明など様々な課題が残されている。これらについては、今後の研究の進化に期待したい。

【参考文献】

- 井形進 2018「大宰府式鬼瓦考－I式Aを中心に－」『大宰府の研究』大宰府史跡発掘50周年論文集刊行会編
石松好雄 1993『筑前国分寺軒丸瓦考』論苑考古学 坪井清足さんの古希を祝う会編
瓜生秀文 2006『国指定史跡 怡土城跡』前原市教育委員会
小田富士雄 1970『観世音寺と国分寺』『古代の日本』角川書店
小田富士雄 1981「北浦廃寺」（九州歴史資料館編『九州古瓦図録』柏書房）
鏡山猛 1937『怡土城址の調査』（日本古文化研究所報告第6）日本古文化研究所
加藤隆也 2012『金武青木－金武西地区基盤整備促進事業関係調査報告－金武青木A遺跡第1次調査、金武青木B遺跡遺跡第1・2次調査』福岡市埋蔵文化財調査報告書第1146集 福岡市教育委員会
九州歴史資料館 2012『大宰府政庁跡』
菅波正人編 2005『九州大学統合移転用地内埋蔵文化財発掘調査報告書 元岡・桑原遺跡群4－第12、15、24次調査の報告－』福岡市埋蔵文化財調査報告書第860集 福岡市教育委員会
菅波正人編 2007『九州大学統合移転用地内埋蔵文化財発掘調査報告書 元岡・桑原遺跡群8－第20次調査報告－』福岡市埋蔵文化財調査報告書第962集 福岡市教育委員会
角浩行（編）1995『Ⅲ、高祖榎町遺跡』『川原川右岸地区遺跡群Ⅰ 川原川右岸地区県営ほ場整備事業に伴う文化財調査報告』前原市教育委員会
主税和賀子 2019「古代九州における造瓦技術の変遷」『平成30年度九州史学会考古学部会発表資料』
中村和博 2008「筑前国分寺における瓦の生産体制」『九州考古学』第83号 九州考古学会
中山平次郎 1916「古瓦類雑考（9）」『考古学雑誌』第7巻第4号
ブルース・バートン 2007「大宰府・筑紫館（鴻臚館）の成立と歴史的意義」『古代の博多 鴻臚館とその時代』福岡市博物館特別展図録：132-135 古代の博多展実行委員会
美浦雄二 2009『中原遺跡Ⅲ 5区の調査－西九州自動車道建設に係る文化財調査報告書－』佐賀県文化財調査報告書第179集 佐賀県教育委員会
毛利光俊彦 1980「日本古代の鬼面文鬼瓦」『研究論集』奈良国立文化財研究所学報38冊
森本幹彦 2016「徳永A遺跡」『新修福岡市史 資料編考古Ⅰ 遺跡から見た福岡の歴史－西部編－』福岡市史編集委員会



第6図 怡土城出土瓦磚類実測図① (1/6)



写真1 末永出土鬼瓦（Ⅱ式）

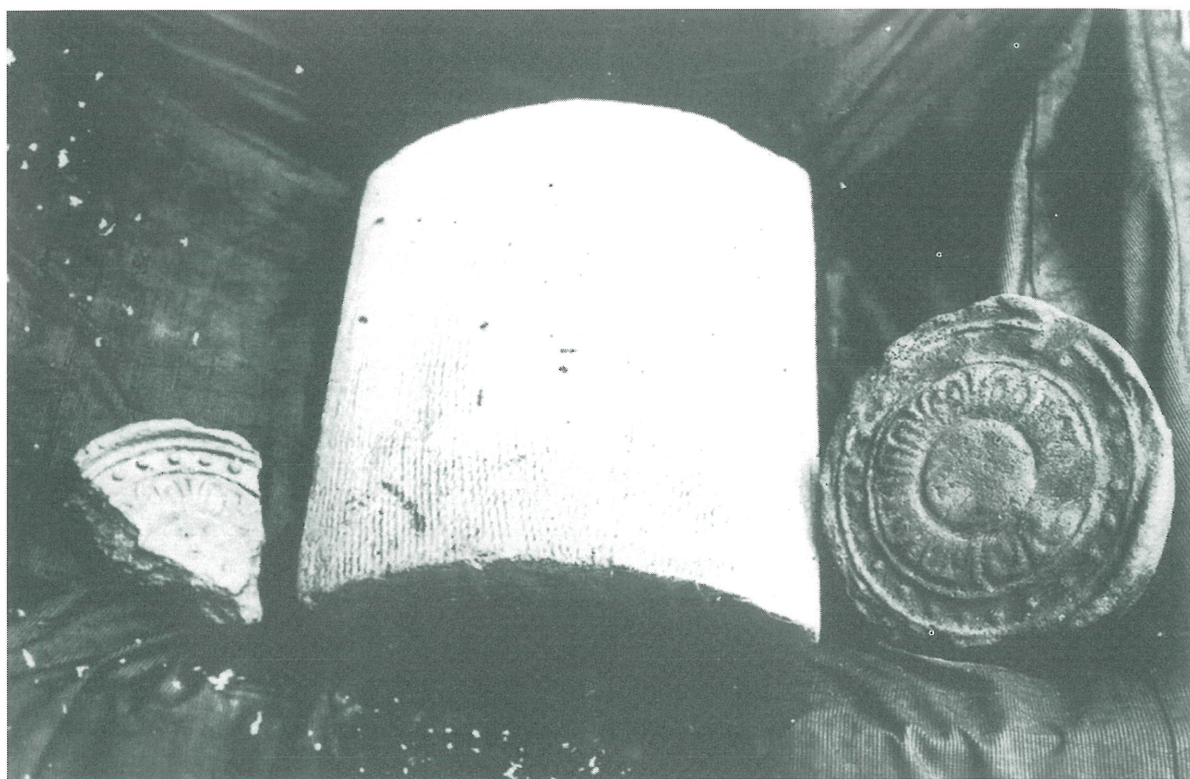


写真2 大圓寺所蔵平瓦・軒丸瓦